

2006 年度 小委員会活動成果報告

(2007 年 2 月 15 日作成)

小委員会名	バイオクライマティックデザイン小委員会		主 査 名：須永 修通 就任年月：2005 年 4 月
所属本委員会 (所属運営委員会)	環境工学本委員会 (熱環境運営委員会)		委員長名：加藤 信介 主 査 名：坂本 雄三
設 置 期 間	2005 年 4 月 ~ 2009 年 3 月		
設 置 目 的 各年度活動計画 (箇条書き)	<ul style="list-style-type: none"> ・地域に付与された自然環境のポテンシャルを活用する設計手法の確立。 ・アジア諸国を含めた亜熱帯・温帯・亜寒帯における自然のポテンシャルを活用した建築や都市に関する研究事例・設計事例の収集。 ・上記に関するさまざまな要素技術の統合化手法についての検討。 ・2006 年度の熱シンポジウム開催。 		
委員構成 (委員名(所属))	委員公募の有無：無(前身のバイオクライマティックデザイン WG の委員構成を活用) 須永修通(主査・首都大学東京) 菅原正則(幹事・宮城教育大学) 齊藤雅也(幹事・札幌市立高等専門学校) 石原修(熊本大学) 宇野朋子((独)文化財研究所) 岡本幹太郎(日本設計) 木村建一(元早稲田大学) 小玉祐一郎(神戸芸術工科大学) 宿谷昌則(武蔵工業大学) 鈴木康司(OM研究所) 高間三郎(科学応用冷暖研) 辻原万規彦(熊本県立大学) 土屋美佳(東京大学) 野沢正光(野沢正光建築工房) 長谷川兼一(秋田県立大学)		
設置 WG (WG 名：目的)	なし		
2006 年度予算	162,000 円	ホームページ公開の有無：有 委員会 HP アドレス： http://news-sv.aij.or.jp/kankyo/s14/	

項 目	自己評価
委員会開催数	6 回(年度内計画を含む)
刊行物 (シンポジウム資料等は除く)	
講習会	
催し物 (シンポジウム・セミナー・研究会・見学会等)	1 .(名称)第 36 回熱シンポジウム「温暖・蒸暑地域から考えるバイオクライマティックデザインの未来 - 持続可能な社会における建築の技術・デザインとライフスタイル - 」 参加者数 90 名 (資料名)シンポジウム名称と同じ
大会研究集会	
対外的意見表明・パブリックコメント等	
目標の達成度 (当初の活動計画と得られた成果との関係)	1 .自然のポテンシャルを活かした建築に関する研究事例・設計事例の収集、およびその統合化手法に関する議論が進んだ。 2 .熱シンポジウムは計画通り実施され、無事終了した。
委員会活動の問題点・課題	1 .電子会議を活用した委員会の実施(委員の構成が遠隔者が多いため) 2 .専用ウェブサイトの有効活用(同上)

* 小委員会活動成果報告書は本書式を基本とする。

* 環境本委員会傘下の小委員会においては、上記の活動成果報告書に加えて、以下の自己評価を記入すること。

* 中間年度には中間評価を、最終年度には最終評価としての自己評価を記入すること。

2006 年度 小委員会活動 自己評価

(中間年度評価)

総合評価 (4段階評価)	A	B	C	D
総合評価に関する 自由記述欄 (理由、特記事項等)	<p>1. 今年度、第36回熱シンポジウム「温暖・蒸暑地域から考えるバイオクライマティックデザインの未来 - 持続可能な社会における建築の技術・デザインとライフスタイル -」の企画および実施を担当(熱環境運営委員会に所属する小委員会の中で、4年周期で持ち回り)した。</p> <p>開催を11月の沖縄としたが、「温暖・蒸暑地域」をキーワードに掲げた今回のシンポジウムに相応しい設定であった。同時開催されたプレッシャーは天候に恵まれ、無事進行した。またそれを踏まえて会議開催する構成であったのは参加者にも好評であった。会議は6セッションからなり、それぞれを担当するコーディネーターを置いたが、各セッションの主張をより明快にすることや、討論の時間を充分確保することが課題として提示されたものの、コーディネーター制についてはシンポジウムの講評において一定の評価を得た。</p> <p>なお、定員120名、90名の参加者数を採算ラインとして予算計画を立てたのに対し、若干の黒字となる決算であった。</p> <p>2. 自然のポテンシャルを活かした建築に関する研究事例・設計事例の収集については、委員会において新たに10件程度達成した。また、その統合化手法に関しては、熱シンポジウムも併せて充実した議論がなされた。</p> <p>熱シンポジウムの6つのセッションは、上欄の本委員会の設置目的に沿うようにも構成されており、中でも、登壇者全員が意匠デザイナーであるセッション(熱シンポジウムでは初めての試み)では、自然環境のポテンシャルを活用する設計手法の確立、ならびに、さまざまな要素技術の統合化手法に関して、また、アジアと沖縄および総合討論のセッションでは、台湾からの参加者を得て、アジア諸国を含めた亜熱帯・温帯・亜寒帯における自然のポテンシャルを活用した建築や都市に関する研究事例・設計事例の収集に関して、大きな成果を得た。</p> <p>以上のように、シンポジウム開催による学会への貢献度および委員会目標の達成度は大きいと考え、今年度の自己評価はAとした。</p>			

- 総合評価は4段階(A>B>C>D)にて、自己評価すること。
- 中間年度における自己評価は、単年度の活動計画・目標に対する達成度にて、最終年度における自己評価は、小委員会の設置目標に対する達成度にて評価する。自己評価の目安は以下の達成度レベルを参照のこと。
 - A 評価：小委員会設置目標に対し、80%以上の達成度
 - B 評価：小委員会設置目標に対し、70%から80%の達成度
 - C 評価：小委員会設置目標に対し、60%から70%の達成度
 - D 評価：小委員会設置目標に対し、60%以下の達成度
- 小委員会の活動に対し、第三者的評価・外部評価(シンポジウム、セミナー等の催し物を開催した場合に収集した参加者の評価など)に相当する情報がある場合には、その内容も記述すること。